

250820 13:15~16:15 名古屋市特別支援教育研究会

特別支援教育における教材教具の活用

－実践で大事にしたいこと－

東北福祉大学 教育学部

杉浦 徹

t-sugiura@tfu.ac.jp

0. はじめに

自己紹介

1. 特殊教育から特別支援教育へ

世界的な障害観の変化 ICIDH から ICF へ

教材教具の重要性

AAC（補助代替コミュニケーション）の活用

GIGAスクール構想の具体化（コロナが拍車）

2. 実践事例から

○知的障害・自閉症のある児童生徒への支援

支援の三原則 視覚的・具体的・肯定的 →構造化をベースにした支援

絵カード・VOCAの活用

→これらを実態に応じて ICT へと

○肢体不自由のある児童生徒への支援

操作スイッチ

VOCA

○読み書きへの支援

タブレット スマホの活用

音声入力、音声読み上げ デフォルトの機能を活用

学習指導要領解説にも活用を促す記述あり 「特別扱い」ではない

3. まとめ

○特別支援教育はコミュニケーション教育
大きく変化する教育の世界 流行と不易の中で

「Not achievement, But emotion」
できしたことではなく、できてうれしい気持ちを育てる

○支援機器活用の留意点

○子どもと係るための7つの原則 まずは教師自身が「わかりやすい」教材として
「教材・教具はことばである」障害児基礎教育研究所 所長 水口浚先生
テクノロジーの古今、軽重を問わず大事にしたい基本

目指すのは共生社会 そのための特別支援教育
新しいものを受け入れつつ、変わらないものを大切に

ありがとうございました。

子ども達と係るための7つの原則

(getting in touch より)

- ① 子どもにあなたがそばに来たこと、いることを知らせましょう。
- ② 子どもがあなたを別の人とはっきり区別して理解しやすいように、あなた自身がいったい誰で、どんな特長のある人間であるのかを知らせましょう。
- ③ 子どもに、「今、何をしているのか」「今、何が起こっているのか」また「これから、何をしようとしているのか」をきちんとわかるように伝えましょう。そのために子どもに合わせて、実物を手がかりにした合図（物や物に触らせること、例えばおむつを交換するならおむつを触らせる等、立たせる場合は、肘の下から持ち上げるように手を当てて、運動を予測させるとか）や身振りサインを工夫して用いることになるでしょう。
- ④ できるだけ、子ども自身が自分で考えてすることを大切にしましょう。
- ⑤ 生活において大人が決めたことを一方的にさせるのではなく、子どもが自分のすることを選べる状況を用意してあげましょう。そして、子どもが選んだことには忠実に応えてあげるべきです（活動等の選択肢を用意、自己選択、自己決定）。
- ⑥ 子どもに今していること（活動）がいつ、どうなったら終わりになるのか、終わることを伝えましょう。また終わったことを伝えましょう。
- ⑦ あなたが子どものそばから離れる時には、きちんと子どもに断ってから、立ち去りましょう。

支援機器活用の留意点

①節約

シンプルな機器、システム、アプローチを使う

②最小の学習

ユーザーの今の知識でできるアプローチがうまくいく

③最小のエネルギー

疲れずに長時間取り組める体の動きでできるアプローチがうまくいく。

④最小の干渉

機器の操作や語彙の修正に気を取られず、活動に集中できる。

⑤最適な適合

本人の個性やニーズに技術を適応させる

⑥実用性と使用

入手しやすいリソースを使った最も着実なアプローチを行う。

⑦根拠に基づく実践

最新の研究・見解から本人に適切かつ有効な実践を行う

引用文献

知念洋美 (2015) ICT を活用したコミュニケーション支援

－効果的な支援のアセスメント－ 肢体不自由教育 221 号